

# 正倉院伝来の貝製品と貝殻 —ヤコウガイを中心に—

木下尚子

## 1. はじめに

正倉院に伝来する宝物には、貝殻を使用した製品が少なくない。これらについてはすでに2度の材質鑑定調査が行われ（昭和28～30年度と平成4～5年度）、35品目に対応する貝種名が明らかにされている<sup>(注1)</sup>。中でも第2回調査において、平螺鈿背鏡や五絃琵琶・四絃琵琶などの華やかな舶来品の装飾に使われた貝がヤコウガイに特定されたことは大きな成果であった。ヤコウガイ *Turbo (Lunatica) marmoratus* (Linnaeus) は熱帯のサンゴ礁海域に生息するサザエに似た大型巻貝である（挿図1）。

この間の昭和37～43年（1962～1968）、中尊寺金色堂（天治元年〔1124〕建立）の解体修理が行われ、装飾の螺鈿に大量のヤコウガイが使われていることが確認された<sup>(注2)</sup>。いっぽう文献史学では、9世紀後半以降日本で消費されたヤコウガイが琉球列島産であることが指摘され<sup>(注3)</sup>、漆芸史学では、日本の螺鈿が唐に由来する螺鈿加工技術を学んで後に漆地螺鈿を展開し、10世紀には中国をしのぐレベルに到達した過程が明らかにされた<sup>(注4)</sup>。こうした研究成果は、最近明らかにされつつある考古学的事実—南島と大和<sup>(注5)</sup>との関係が9～12世紀に緊密化することを示す複数の遺跡の存在<sup>(注6)</sup>—と矛盾しない。

先学の研究を整理すると、日本の螺鈿工芸は唐に由来する螺鈿加工技術を土壌として成長し、9世紀以降はヤコウガイ産地を琉球列島に得て独り立ちしたといえることができる。つまり螺鈿技術を習得した古代日本にとって、琉球列島において自前の産地を確保できたのはきわめて重要な出来事だったのである。

ここで問題にしたいのは、大和の人々がどのように南島のヤコウガイを見いだしたかである。正倉院には、この間の事情を示す宝物が複数伝えられている。わたしはかつて、ヤコウガイを用いた国産品とみられる正倉院伝来品—斑貝鞆御帯残闕<sup>はんばいさつぱくおんおびのざんけつ</sup>（聖武天皇が愛用したとされる帯）・楓蘇芳染螺鈿槽琵琶<sup>かへす おうぞめら でんそうのびわ</sup>（国産の初期の螺鈿）等について検討し、以下を指摘した<sup>(注7)</sup>。

- ・ 8世紀前半の帯作りの工人は、ヤコウガイの加工に習熟していなかった。
- ・ これに使用されたヤコウガイは唐あるいは南島からもたらされたと思われる。
- ・ 8世紀後半に登場する国産螺鈿に使われたヤコウガイは、唐からの舶載品であった可能性が高い。

前回は写真にもとづいて検討したため、宝物への理解は部分的なものに留まっていた。今回宝物を実見する機会が得られたことで、従来の認識を確認しさらにその一部を改めるに至った<sup>(注8)</sup>。

## 2. ヤコウガイ貝殻の構造

挿図3は、沖縄産の現生ヤコウガイ（殻径17.6cm、やや大形のもの）の体層部断面を示したものである（ヤコウガイ各部位の名称は文末の参考図を参照されたい）。ヤコウガイの貝殻は、端部の薄い殻口をのぞき、厚さはどの部分も5mm以上で、縫帯や殻軸部分では15～25mmになる。断面の構造に注目すると、表面の殻皮の下には不透明な層と半透明な層がある。外側の不透明層は稜柱層とよばれ<sup>(注9)</sup>、カルシウムの結晶が貝殻の表面に対して垂直に並んでいる。その内側の半透明層は真珠層<sup>(注10)</sup>で、真珠光沢をもつ薄い層が貝殻の表面と並行に重なっている。

それぞれの層をさらにみると、稜柱層は、殻皮に近い緑色の部分と内側の白い部分に分かれる。緑色部分の厚さは1mm前後で、白い部分の厚さは1mmから6mmである。真珠層は殻口付近では薄く、体層部分で3mm前後、縫帯から軸唇近くでは20mmにもなる（挿図4）。ヤコウガイ殻のずっしりとした量感が、真珠層の厚みによっていることが理解される。真珠層の内側、つまり貝殻内面は、白っぽい半透明な層で覆われる。この層は真珠層に明らかに連続しながら白さを増しており、螺塔部内部で厚くなっている。

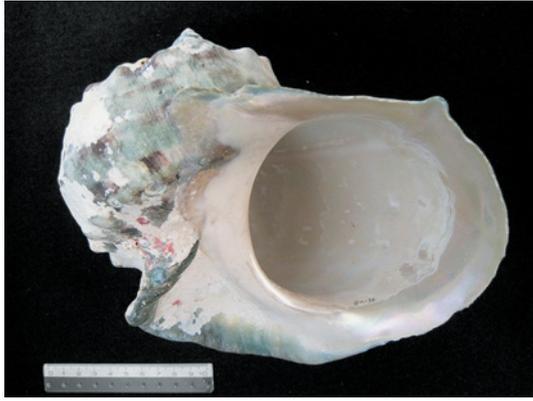
以上にもとづいてヤコウガイの貝殻の構造を整理すると表1のようになる。貝殻の巻きが重なったり接合したりする部分においても、断面ではこの順序を保っているため、そのルールに従えば、貝殻の内外方向を製品に正しく対応させることができる。

表1. ヤコウガイ貝殻の構造（殻径17.6cmの場合）

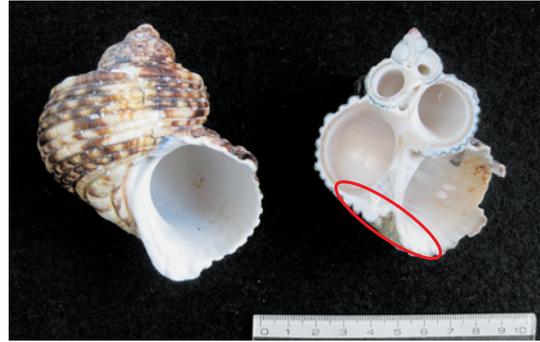
名称	色調	厚さ	貝殻の内外
殻皮	① 褐色～白色	1mm以下	外側 ↑ ↓ 内側
稜柱層	② 緑色不透明	1～2mm	
	③ 白色不透明	1～6mm	
真珠層	④ 黄白色半透明	3～20mm（軸唇部）	
	⑤ 白色半透明	0.5～5mm（螺塔部）	

貝殻内側の表面、すなわち真珠層の表面には、ヤコウガイの成長の軌跡を残す一繋がり細かい曲線が重層して認められる。線は貝殻表面の太い肋に対応して強く湾曲している。先史時代のヤコウガイ製品では、光沢ある薄い層がしばしばこの曲線に沿って剥落することから、この線が貝殻内部の構造と対応していることがわかる。この曲線は、殻口から奥に10cm前後までは、5～10mm幅で複雑に波打っているが、それより奥になると螺肋部分で屈曲する規則的で密な平行曲線となる。

なお、平成4・5年（1992・1993）の材質調査（平成8年報告書）では、肉眼観察と拡大CCDカメラによる拡大観察、紫外線照射<sup>(注11)</sup>による方法が採用され、材質が総合的に判定されている。貝種の同定はおもに肉眼観察により、紫外線照射は貝殻の使用部位の判定に使用されている。すなわち黄白色蛍光であれば貝殻の真珠層に対応し、暗紫色蛍光であれば稜柱層などそれ以外のものと判断されている。



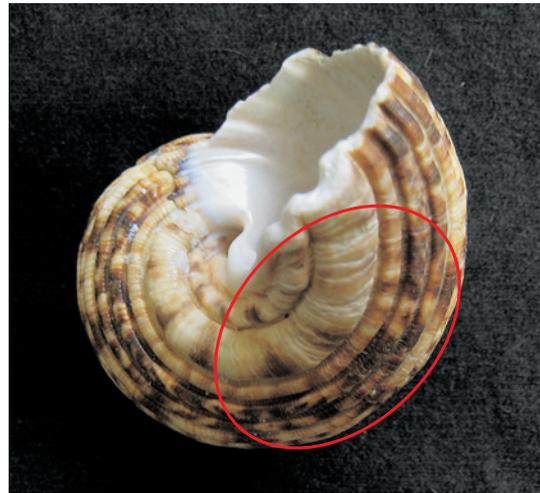
挿図1 ヤコウガイ貝殻



挿図5 チョウセンサザエ貝殻 (左) とその切断面 (右)  
赤く囲んだ箇所は貝殻のもっとも厚い部分



挿図2 ヤコウガイ (螺頂部から撮影)



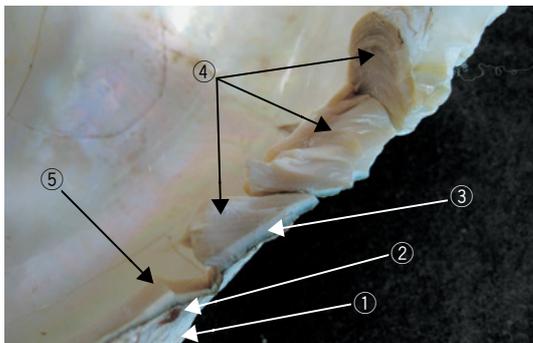
挿図6 チョウセンサザエの体層 (臍側から撮影)  
赤く囲んだ部分は挿図5の右側の赤丸部分には  
ほぼ対応する



挿図3 ヤコウガイ体層 (右側が殻口)



挿図7 チョウセンサザエ体層  
稜柱層を一部除去し、下の真珠層を出す



挿図4 貝殻の断面 (挿図3の赤い円内)  
番号①～⑤は表1に対応

### 3. 観察所見

実見した宝物は、以下の4種60点である。

- ・ヤコウガイ製品3種38点（「斑貝鞆御帯残闕」7点、「貝袂<sup>ばいけつ</sup>」25点、「貝環<sup>ばいかん</sup>」6点）
- ・ヤコウガイ貝殻1点
- ・楓蘇芳染螺鈿槽琵琶1点
- ・アコヤガイ製匙20点

ヤコウガイ製品とヤコウガイ貝殻については、個別のデータを表2に示した<sup>(注12)</sup>。

実見では、肉眼観察を主とし、実体顕微鏡を併用した。また複数の現生ヤコウガイ貝殻等を比較資料とした。

#### 3.1. ヤコウガイ製品

##### 3.1.1. 斑貝鞆御帯残闕（北倉6）

『国家珍宝帳』記載の帯である。現在、帯本体である鞆はほとんど失われ、飾りの貝製品とこれを帯に固定する金具だけがのこっている。それらは、丸鞆4点、巡方2点、鉈尾1点である。貝製品はいずれも端正な形状で、それぞれ同じ大きさの座金に載り、その下に帯の本体である鞆を挟んで同じ形のもう1枚の座金に対応している。貝と座金は、直径2mm余の4～5個の鉈で相互に連結・固定されている。金属板と座金の間に鞆がのこるものもある。平成8年の調査報告では「丸鞆と巡方には波形の縞や筋が認められ、ヤコウガイの貝殻外側の稜柱層を巧みに模様を生かして用いたものと思われる」とし、紫外線照射の結果を総合してこれをヤコウガイ製品と判断している。貝製品は7点で、整理番号が1から7までふられている。

##### No. 1：丸鞆（挿図8-1、9-1、挿図10、11）

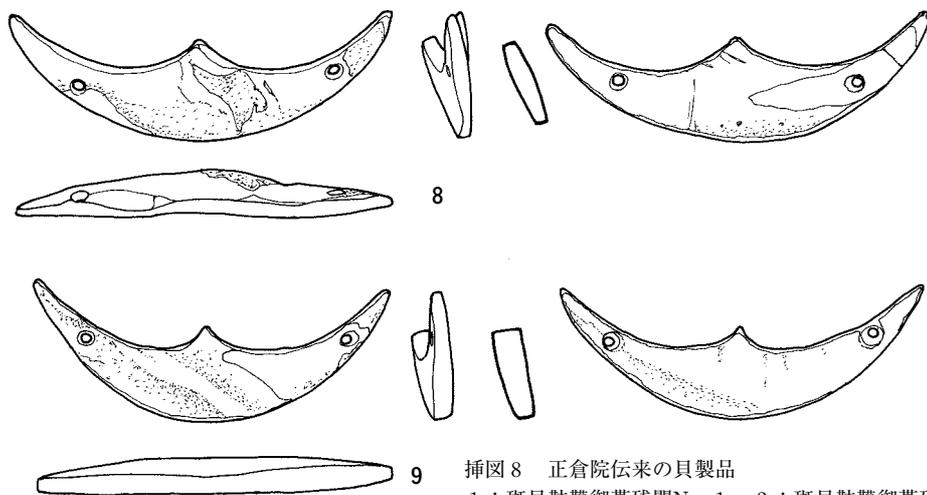
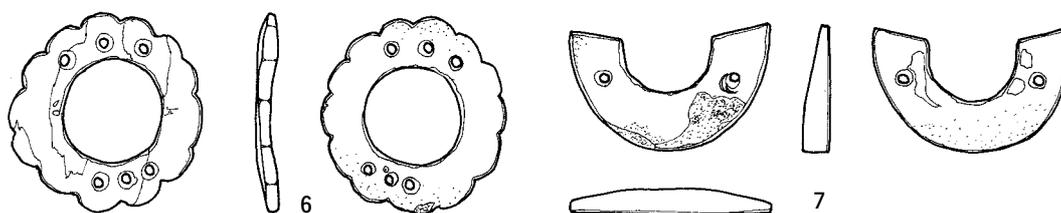
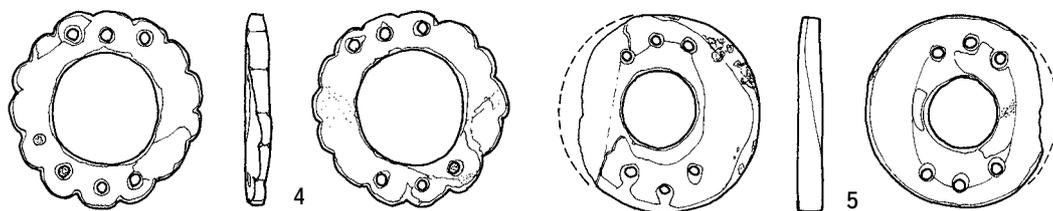
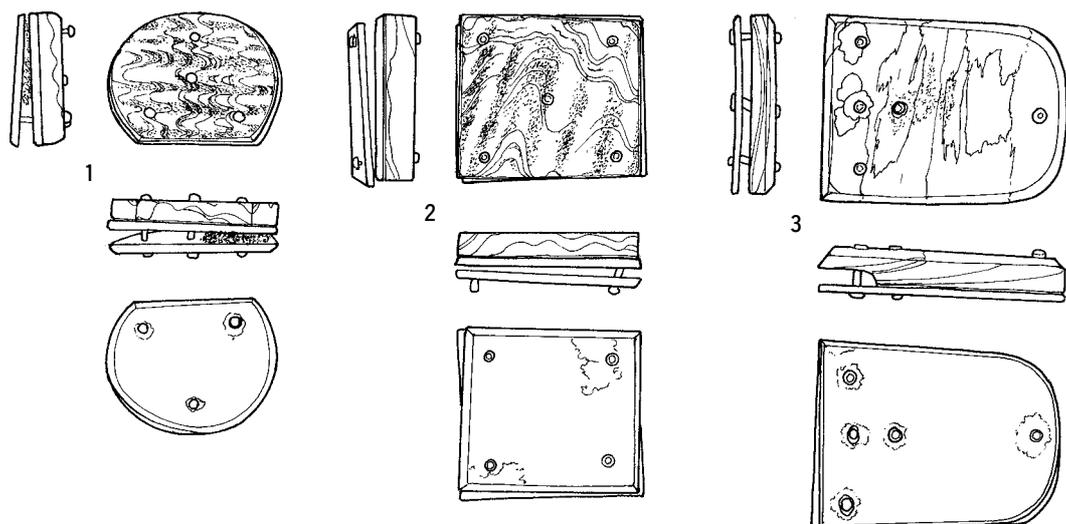
貝殻表面には幅2mmほどの白い縞が褐色の条線と交互に6本並行して走り、成長線らしき曲線がこれらを横断して流水文状に連続する。側面に表れる縞状部は白く不透明で、その下に乳白色で透明度の鈍い層が接し、両層の境界は不明瞭な部分と明確な部分がある。白と褐色の縞を含む不透明な層が稜柱層で、この下の透明度の低い乳白色層が真珠層であろう。平成8年の紫外線照射では暗紫色蛍光が発せられており、報告者はこれを稜柱層の特徴としている。したがって本品は、貝殻表面を殻皮側から研磨して稜柱層を製品の表面とし、内側の真珠層を裏面としているとみてよい。

今回、本品の表面にみられる縞模様の部位や、真珠層と稜柱層が波状に接する部位を、持参したヤコウガイ標本（殻径17cm、ヤコウガイではやや大形）と対照しつつ探したが、対応する部位を特定することはできなかった。帯飾りの色調や文様など外見の特徴と厚みに対応する貝殻の形状について、真珠層をもつ貝殻を対象に検討すると、アコヤガイ *Pinctada martensii* (Dunker)・クロチョウガイ *Pinctada margaritifera* (Linnaeus)・サザエ *Turbo* (*Batillus*) *cornutus* (Lightfoot)・アワビ類 *Haliotis* (*Nordotis*) spp.・サラサバテ *Tectus* (*Rochia*) *maximus niloti-*

表2. 実見したヤコウガイ等製品・ヤコウガイ一覧

任意 番号	貝製品名称	正倉院整理番号	大きさ(mm)			重 量 (g)	備 考
			長径	短径	厚さ		
1	1 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 1	22.7	17.3	3.2~3.3	9.9	丸靱。挿図8-1、挿図10、11。
2	2 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 2	22.4	17.6	3.2	9	丸靱
3	3 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 3	22.9	17.5	3.0~3.2	9.9	丸靱
4	4 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 4	22.7	17.6	2.8~3.0	9.1	丸靱
5	5 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 5	24.1	21.6	3.4~3.7	15.9	巡方。挿図8-2、挿図12、13。
6	6 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 6	24	21.8	3.9~4.1	15.7	巡方
7	7 斑貝鞆御帯残闕	北倉6 7	32	24.7	3.8~4.5	16	鉞尾。挿図8-3、挿図14、15。
2	8 貝瑛(月形)	中倉124 1	5.01	13.8*	3	2.67	両側穿孔。挿図8-8。
9	9 貝瑛(月形)	中倉124 2	45.1	11.6	2.8	2.01	両側穿孔、未通孔1
10	10 貝瑛(月形)	中倉124 3	46.8	14.3	3.1	2.72	両側穿孔
11	11 貝瑛(月形)	中倉124 4	50.3	13.1	2.7	2.82	片側穿孔、孔内に繊維質残る。
12	12 貝瑛(月形)	中倉124 5	47	12.6	2.5	1.91	片側穿孔
13	13 貝瑛(月形)	中倉124 6	45.7	11.7	2.1	1.51	片側穿孔
14	14 貝瑛(月形)	中倉124 7	48.1	11.1	3.9	2.49	両側穿孔、未通孔2
15	15 貝瑛(月形)	中倉124 8	46.4	11.9	4.3	3.28	両側穿孔。挿図8-9、挿図16、17。
16	16 貝瑛(月形)	中倉124 9	41.3	12.8	2.2	1.72	片側穿孔
17	17 貝瑛(月形)	中倉124 10	46.1	14.8	2.4	2.53	片側穿孔?
18	18 貝瑛(月形)	中倉124 11	48.2	14.5	2.3	2.36	片側穿孔
19	19 貝瑛(月形)	中倉124 12	46.3	12.9	2.8	2.26	表面一部剥離
20	20 貝瑛(月形)	中倉124 13	41	11.4	1.8	1.16	表面一部剥離
21	21 貝瑛(月形)	中倉124 14	36.7	11.6	2.4	1.15	両側穿孔
22	22 貝瑛(月形)	中倉124 15	40	13.5	2.1	1.54	クロチヨウガイ、片側穿孔?
23	23 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 16	27.1	15.1	2.7	1.69	孔内に繊維質残る。
24	24 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 17	26.3	14.1	3.7	1.33	両側穿孔
25	25 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 18	23.1	15.8	2	1.09	両側穿孔
26	26 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 19	23.4	15.4	2.4	1.13	両側穿孔、未通孔1
27	27 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 20	21.5	16.1	2.7	1.76	両側穿孔、接着剤様付着
28	28 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 21	25.8	13.8	2.2	1.25	表面一部剥離
29	29 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 22	22.9	16.6	3.7	1.84	片側穿孔。挿図8-7、挿図18、19。
30	30 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 23	25.3	12.8	3.4	1.09	両側穿孔
31	31 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 24	25	12.9	2.5	0.9	両側穿孔?
32	32 貝瑛(馬蹄形)	中倉124 25	26.9	14	2.8	1.19	両側穿孔
3	33 貝環	中倉125 1	26.3		3.3	2.56	花形、片側穿孔。挿図8-4、挿図20、21。
34	34 貝環	中倉125 2	25.3		2.3	1.73	花形、両側穿孔、未通孔1。挿図8-6、挿図24。
35	35 貝環	中倉125 3	26.2		2.9	2.72	片側穿孔
36	36 貝環	中倉125 4	24		3.3	3	片側穿孔、未通孔2、孔内繊維質残る。
37	37 貝環	中倉125 5	25.7		3	2.63	一部剥離、片側穿孔。挿図8-5、挿図22、23、25。
38	38 貝環	南倉178 4	25.4		2.5	2.56	片側穿孔
4	39 螺殻	南倉174	殻高158	殻径152		671.5	第206号櫃納物其25

\*中央部の幅。以下同じ。



挿図8 正倉院伝来の貝製品

1：斑貝鞋鞆御帯残闕No. 1、2：斑貝鞋鞆御帯残闕No. 5、  
 3：斑貝鞋鞆御帯残闕No. 7、4：貝環No. 1、5：貝環No. 5、  
 6：貝環No. 2、7：貝玦No. 22、8：貝玦No. 1、9：貝玦No. 8

*cus* (Linnaeus) はこれに該当せず、結局手許の標本でこれに対応するのは、体層に細い肋をもつチョウセンサザエ *Turbo (Marmarostoma) argyrostomus* (Linnaeus)<sup>(注13)</sup>であった(挿図5左)<sup>(注14・15)</sup>。

#### No. 2 : 丸靱 (挿図9-2)

本品の表面にはNo. 1にみられた縞の方向と直角方向に、やはり幅1.5mmほどの白い縞が、濃淡によって8条認められる。No. 1と同様、表面に不透明な層が、その下に透明度の鈍い層があり、両層の境界は明瞭である。貝の質はNo. 1に共通し、前者が稜柱層、後者が真珠層であろう。平行線の小口側の側面に、直径1~1.5mmの虫食い状孔が不規則に3個並ぶ。また上面にも類似した小孔が1個ある。

#### No. 3 : 丸靱 (挿図9-3)

貝殻表面に連続した波状文四単位が斜めにみられる。その幅は6mmで規則性があり、ヤコウガイの波状文とは異なる。表面の波状文に対応した層は側面に続き、さらに下層には波状の境界を介して鈍い透明度の層が重なる。層の状況はNo. 1・No. 2に同じで、上層は稜柱層、下層は真珠層とみられる。周縁に後世のものともみられる径2mmの欠損がある。

#### No. 4 : 丸靱 (挿図9-4)

表面にV字の波状文(推定幅27mm)の一部がのこり、No. 1・No. 2にあるような縞や条線はみられない。V字の波は稜柱層の研磨によって作られたものとみられるが、その下の層が真珠層かどうかは不明である。さらにこの下に真珠層が接している。ヤコウガイにもチョウセンサザエにも求めることの可能な造形であろう。

#### No. 5 : 巡方 (挿図8-2、9-5、挿図12、13)

表面には、No. 2の丸靱に共通する濃淡による条線が7本並行して斜めに通り、これに白く不透明な波状の文様が角度をなして被さっている。二つの層の関係を側面で見ると、後者は貝殻の成長障害によるものと判断される。表面は稜柱層で、真珠層は一つの側面の下層に一部認められた。No. 1、No. 2、No. 3と同じ素材とみてよいだろう。

#### No. 6 : 巡方 (挿図9-6)

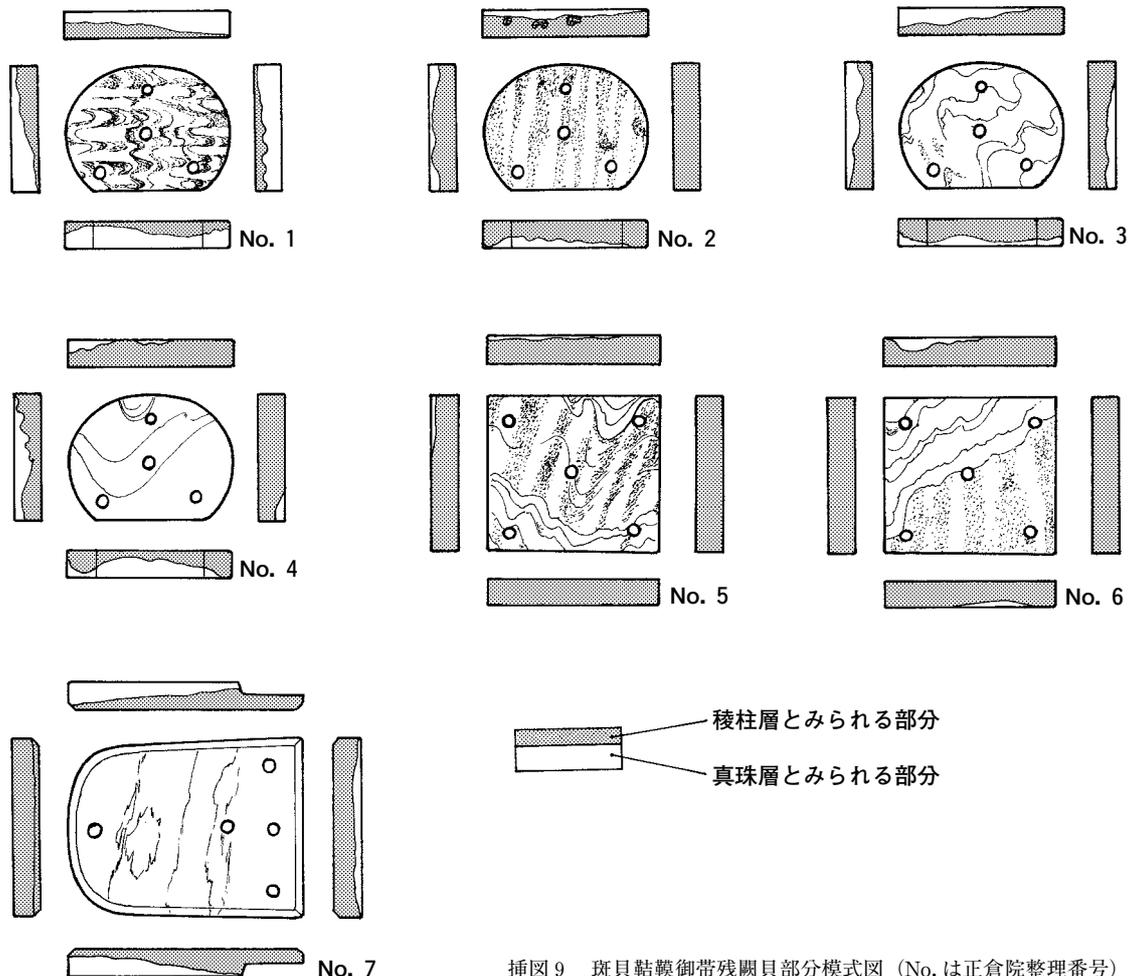
方形の表面の、対角線で区切られた一方に波打った白い文様が対角線に沿って2列重なり、もう一方の部分には濃淡による白い縞ときわめてほんやりした褐色の条線が平行して5本みえる。対角線状に波打つ白い部分はNo. 5と同様貝殻の成長障害の痕跡とみられる。表面は稜柱層で、その下に真珠層が一部みられる。No. 1、No. 2、No. 3、No. 5と同じ素材であろう。

#### No. 7 : 鉈尾 (挿図8-3、9-7、挿図14、15)

短辺と平行して直線状の成長線が多数認められ、ほかに縞や条線などはまったくみられない。表面の白い部分は稜柱層で、その下から真珠層が一部現れている。側面の状況などから使用部位はヤコウガイの殻口上面であることがわかる。ゆるやかに波打つ貝殻表面がわずかに斜めに削られているため、稜柱層上部の緑色の部分が一部にのこっている。

## 観察所見

- ・北倉6の斑貝鞋鞆御帯残闕に使用された貝殻はヤコウガイとされていたが、7点中5点に認められる白い縞と褐色の条線の組み合わせは、ヤコウガイ貝殻のどの部分にも対応させることができず、チョウセンサザエともっともよく対応した。
- ・斑貝鞋鞆御帯残闕に使用された貝殻は、鉦尾の1点はヤコウガイであり、丸鞆3点と巡方2点はチョウセンサザエ亜属 *Turbo* (*Marmarostoma*) spp. とみられ、丸鞆1点はそのどちらかであろうと考えられる。チョウセンサザエ亜属の貝について、今回は手許に標本のあったチョウセンサザエを対応させたが、種名の特定についてはさらに検討する必要がある。
- ・チョウセンサザエ亜属を使用して帯飾りを作る場合、使用された可能性のもっとも高い部位は底面の殻軸寄りの部分である。貝殻の大きさを勘案すると、1個の帯飾りには貝殻1個が対応するとみられる。
- ・7点の帯飾りのうち、鉦尾をのぞく6点には真珠層が表面に現れておらず、白く不透明な稜柱層の部分をかまざまに研ぎ分けて、1点ごとに異なる文様を表現している。鉦尾についても真珠層の表出は一部のみである。帯飾りのこうした外見をみる限り、これを製作した工人は真珠層が表面に出ることを意図的に避けたと考えざるをえない。
- ・現在帯飾りは7個伝わっているが、通常は帯1条に対して12~14個が1セットになっている



挿図9 斑貝鞋鞆御帯残闕貝部分模式図 (No. は正倉院整理番号)



插图10 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 1



插图11 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 1



插图12 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 5



插图13 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 5



插图14 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 7



插图15 斑貝鞋鞅御帶残闕 No. 7



插图16 貝玦(月形) No. 8



插图17 貝玦(月形) No. 8(部分)



插图18 貝玦（馬蹄形） No. 22



插图19 貝玦（馬蹄形） No. 22



插图20 貝環 No. 1



插图21 貝環 No. 1（部分）



插图22 貝環 No. 5



插图23 貝環 No. 5（部分）



插图24 貝環 No. 2



插图25 貝環 No. 5

たと考えられる。残存する7個のうち多くがチョウセンサザエ亜属の貝殻を使用していることを踏まえると、その他の多くも同じ貝殻が使われた可能性が高いとみてよいだろう。

### 3.1.2. 貝殻 (中倉124)

伝来する貝殻は、中倉124の25点である。貝殻には月形とされる両端の尖った形状のもの15点 (No. 1～15) と、馬蹄形のもの10点 (No. 16～25) の2種類がある。その用途は明らかではない<sup>(注16)</sup>。平成8年の報告では、以下のように記されている。

「観察の結果、貝殻片に稜柱を残すもの、裏側に付着物の認められるもの、他のものとは多少異なり透明感がそれほどなく光沢の鈍いものなど種々認められた。紫外線 (365nm) 照射するとすべて暗紫色に光る。おそらくこれは漆などの付着によるものと考えられる。貝殻の形態的特徴から判断していずれもヤコウガイであろうとも思われる。」(注 (1) ②文献、p. 7)

#### No. 1～15：貝殻 (月形) (挿図8-8・9、挿図16、17)

15点のうち、14点はヤコウガイに近い。No. 15は色調が他の製品と明らかに異なり、現生標本との比較からクロチョウガイの可能性が強いと判断された<sup>(注17)</sup>。またこれらのうち1点は接合資料であり (No. 12)、3点は外湾する先端部を欠損している (No. 13～No. 15)。No. 4の孔内側には繊維質のものが認められた。平成8年報告で指摘された漆などの付着は認められなかった。

15点はすべて同じ形であるものの、大きさ、湾曲の具合、内側にくり込まれた二つの円弧の状況などは、個々に異なっている。これら15個は厳密に同形同大である必要のない製品だったとみられる。製品の半数の表面には真珠層上に稜柱層が残存しており、表面はまだらである。No. 7とNo. 13にはヤコウガイの肋の痕跡が認められること、製品全体がほとんど平坦であることから、これらはヤコウガイの肋にわずかにかかる貝殻の平坦面を用いたと推測される。そのほかの製品は緩やかに湾曲した形状から、ヤコウガイの体層を使用したとみられる。

製品の側面には縦方向の研磨痕がのこるもの、穿孔の位置を改めたために孔近くに1～2の未通孔を留めるものが2例あり、全体に入念な製作物とはいえない。穿孔は両面のものと片面のものがあって一様ではない。ほとんどの製品は孔の周縁に細かい剥離やナレ<sup>(注18)</sup>が認められる。また製品周縁の角も全体にナレており、頻繁に使用したことを窺わせる。端部を欠損するものがみられること、No. 8では孔の表層上方に欠損がみられ (挿図8-9、挿図16、17)、その反対側 (下方) にナレが著しかったことを鑑み、上下方向に孔に紐を通して使用したと推測される。両端の小孔の位置に、端部に寄ったものと中央寄りのものの2種類があるのは、使用方法に関わっているのだろう。

#### No. 16～25：貝殻 (馬蹄形) (挿図8-7、挿図18、19)

クロチョウガイの可能性のあるNo. 21をのぞき、すべてヤコウガイ製とみられる。No. 16の孔内に繊維質のものが残存し、No. 20の一部に接着剤様の付着物が認められた。10点がすべて厳密な同形同大ではないこと、両端の小孔の位置が個体によって若干異なること、真珠層上に稜

柱層を残した加工であること（挿図18、19）、研磨痕や未通孔をのこす製作であることの点において、月形の貝殻に共通している。No. 22の孔はいずれも上方（同上）にナレが認められるので、孔を通った紐が上方に向かっていたことがわかる。月形の貝殻同様の使用方法が推定される。

#### 観察所見

- ・中倉124の貝殻25点のうち23点はヤコウガイ製、1点はクロチョウガイ製、1点はそのどちらかであろうと判断された。
- ・2種類の同じ形状の製品がそれぞれ15個と10個あり、使用された痕跡を明らかにとどめることから、2孔に紐を通し組み合わせて使われた製品だったと推測される。
- ・製作はとくに丁寧ではない。
- ・研磨で仕上げる際、大半は貝殻の真珠層上に稜柱層をのこしたままで終了しているため、表面はまだらである。

#### 3.1.3. 貝環（中倉125、南倉178-4）

合計6個が伝わる。5個（No. 1～5）は中倉125、1個は南倉178-4号にそれぞれ所属する。前者のNo. 1とNo. 2は周囲に花形の刻みをいれ、その他は円形で、向かいあう位置にそれぞれ3個の小孔が並ぶ。平成8年報告では、以下のようにのべられる。

「紫外線照射（365nm）で黄白色蛍光を発せず、すべて暗紫色を呈する。これは裏側の付着物によるものと考えられ、材料はヤコウガイであると思われる。」（注（1）②文献、p. 7）

##### 中倉125 No. 1：貝環（挿図8-4）

色調等からヤコウガイ製とみられる。円形の上下（図の位置でみて）に対応するように3個の孔があく。下方の端には貫通していない孔が1個あり、その隣の孔内には褐色の繊維質のものがつまっている。他の孔にも周縁には同じ繊維が付着していて、ここに繊維質のものが通っていたことがわかる。表面の片面は稜柱層とみられる薄い層が部分的にのこる真珠層で、反対の面はすべて真珠層である。14個の花形の刻みに厳密な規則性はなく、中央の孔も厳密な正円形ではない。孔の使用痕は円環の外側と孔どうしを結ぶ方向にみられるので、紐で3孔を結びながら上下方向に連結していた使用法が想像される。本品表面には細かい研磨痕がのこり、周縁はナレている（挿図20、21）。実際に一定期間使用した製品だったことが窺われる。

##### 中倉125 No. 2：貝環（挿図8-6、挿図24）

No. 1とはほぼ同じであるが、花形の刻みは13個である。稜柱層の一部残る表面と、真珠層に覆われたもう一方の表面をもつ。上下方向に3個ずつの小孔をうがう。未通孔が1個認められる。上方と下方の3個は間隔が異なり、形状の厳格さはなかったようである。製作の状況はNo. 1に同じである。ヤコウガイ製であろう。

##### 中倉125 No. 3～5：貝環（挿図8-5、挿図22、23、25）

3個とも円環形をなすが、厳密な正円形ではない。No. 5では、表面に細かい研磨痕が認められ、表面の真珠層が薄く剥離して一部を欠損している。使用中の破損であろう。周縁部はナレ

ており、3個の小孔は下（図の位置で）方向に使用痕が明瞭で、孔の内面に褐色の繊維質のものがわずかに付着している。裏面には貝殻内面の白色層（真珠層）が一部残っている。No. 3、No. 4も基本的にNo. 5の状況に同じである。No. 4の小孔には繊維質のものが残存し、未通孔が2個のこっている。ヤコウガイ製であろう。

#### 南倉178-4：貝環

端正なつくりのヤコウガイ製品で、作風は中倉125のNo. 3～5に同じである。孔に使用の痕跡が認められる。

#### 観察所見

- ・貝環は中倉125の5個と南倉178-4の1個の合計6個のこり、すべてヤコウガイを使用した製品とみられる。
- ・花形と円環形の2種類がそれぞれ2個と4個ずつあり、いずれも三つの小孔を線対称の位置に穿つ。
- ・孔内には褐色系の繊維が残存し、全体にも使用された痕跡を明らかにとどめる。3孔に紐を通して組み合わせて使われた製品だったと推測される。表面にも使用された痕跡をとどめている。
- ・製作はとくに丁寧ではない。
- ・研磨で仕上げる際、大半は貝殻の真珠層上に稜柱層をのこしたままで終了しているため、表面はまだらである。
- ・平らな形状からみて、これらはヤコウガイの体層上面を使ってつくられたとみられる。

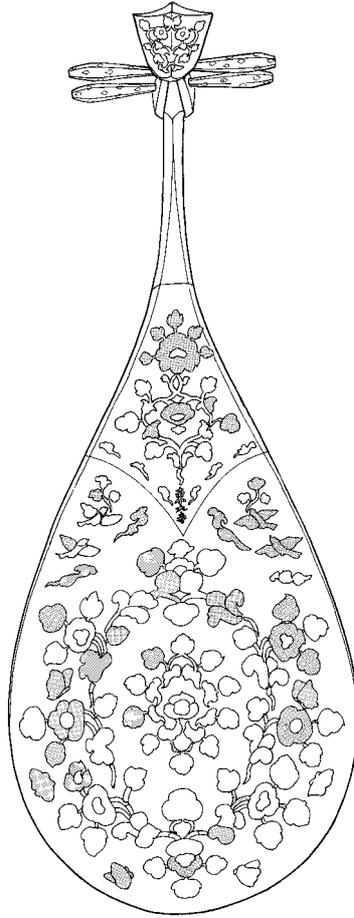
### 3.2. ヤコウガイ貝殻（南倉174 第206号櫃納物 其25 螺殻）（挿図27）

殻高15.8cm、殻径15.2cm、重さ671.5gのヤコウガイ貝殻である（挿図27）。ヤコウガイとしては中型のもので、殻皮は白っぽい。軸唇表面には径0.1mmほどの孔が多くみられる。殻口には細かい破損があり、端部はナレているため、多くの人の手を経てきたような印象をうける。軸唇上の体層の一部は擦られているが人為かどうか不明である。明らかな加工の痕跡は認められない。奄美大島などの7～9世紀の遺跡で出土するヤコウガイを見慣れた目には、大きさや美しさにおいて本品はさほど優品にはみえない<sup>(注19・20)</sup>。

### 3.3. 楓蘇芳染螺鈿槽琵琶（南倉101-1）（挿図26）

本品は、螺鈿にヤコウガイとアワビ<sup>(注21)</sup>が併用されているもので、槽の遠山に刻まれた「東大寺」銘、その他の国産素材（楓、下地顔料など）の検討から、国内で作られた琵琶である可能性が高いとみられる（挿図26）。今回の実見では、螺鈿としての美しさにおいて、ヤコウガイとアワビにどれほどの差違があるのかをみるのが、第一の目的であった。

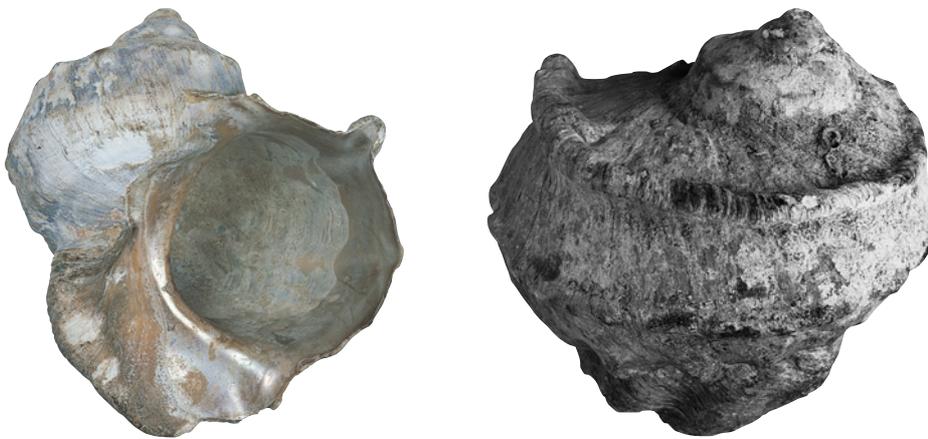
実見した結果、二つの素材は、光のあたる方向によってはその効果の明らかに異なることを見分けられるが、そうでなければほとんど区別できなかった。またアワビはそれなりの美しさ



右図は注(1)文献②の  
図2をもとに作成。

■ アワビとみられる部分  
□ ヤコウガイとみられる  
部分ほか

挿図26 南倉101-1 楓蘇芳染螺鈿槽琵琶 長さ97cm



挿図27 南倉174 螺殻(ヤコウガイ貝殻)の腹面(左)と背面(右) 殻径15.2cm

をもち、その使用が美的価値を減少させるという印象も持たなかった<sup>(注22)</sup>。工人たちは、作業に臨んで必要な螺鈿の大きさにあわせ、二つの素材を適宜使い分けていたのであろう。ヤコウガイとアワビの使い分けに規則性がみられないのは、こうした理由によっているのだろう。

### 3.4. アコヤガイ製匙（南倉49-1・2 貝匙）（挿図28）

匙はアコヤガイの匙部とハコネダケまたはカンチクの柄部からなり、貝の匙部を柄にかませ、銅釘1本によって両者を鈍角に固定している（挿図28）。素材のすべてを国内でまかなうことができ、製作の技術も素朴である。国産品とみてよい宝物であろう。実見したものは20点であるが、中倉に伝えられるものは60点、このほかに少しの残欠があるとされ、10点が1束になっている<sup>(注23)</sup>。平成8年報告において、アコヤガイ左殻<sup>(注24)</sup>が素材であること、アコヤガイの老成貝<sup>(注25)</sup>が使用されていることが示されている。今回は、匙の形状を観察し、その使用部位を実測図にもとづいて示すことを目的とした。

当該品はアコヤガイの殻皮全面を丁寧に磨いて真珠層をだしたもので、匙中央部の厚さは0.5mmの華奢な製品である。柄の方向に長い円形をなし、その形状は花びら型で先端がやや尖り気味であるが、円くなっているものもあり、その形状は一様ではない。60点の貝匙の匙部の形状を写真で見ると形状の差は微妙であり、二つを作り分けた意図を感じることはできない。中に2点円形に近いものがあるが、とりたてて区別する必要はないだろう。

アコヤガイにおける匙の使用部位については、平成8年報告に詳しく示されており、「真珠層を最大限に利用し稜柱層にはかからないような曲線を描いて」（注（1）②文献、p.19）貝殻が使用されている。今回は高知県産の標本と、貝匙の中では大型の第1号の1（No.1）を比較して図示した。貝殻と匙の形状を比べると、匙部は貝殻のもっとも窪んでいる部分を中心に閉殻筋痕と収足筋痕の部分を取りこむように使用されていることが理解される。アコヤガイの左殻の形状は貝殻によって多少異なっているので、匙の形状の差は、素材の形状に関わっているといえるだろう<sup>(注26)</sup>。

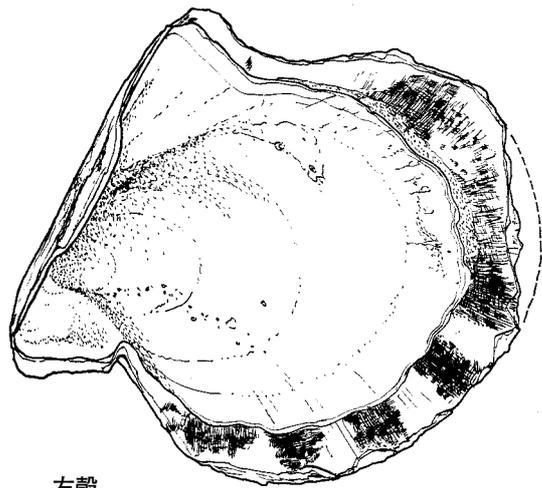
## 4. 考察

### 4.1. 貝製品の製作意識

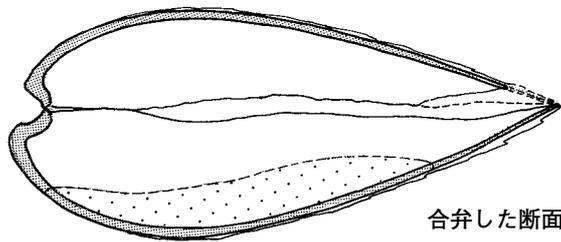
帯飾り・貝瑛・貝環は、ヤコウガイ・チョウセンサザエ亜属の貝・クロチョウガイなどいずれも真珠層のめだつ熱帯の貝殻が使用されている。こうした貝殻を選んでいるからには、その光沢の美しさを製品に生かすことが当然予想されるのであるが、3種の製品を実見してもその意識を感じるができなかった。今回もっとも理解に苦しんだのがこの点である。

斑貝鞆御帯残闕では、伝来7点のうち、大きな鈍尾のみが明らかにヤコウガイ製で、これより小型の丸鞆と巡方にはチョウセンサザエ亜属の貝が多く使用されていた。製品はすべて真珠層の表出を避け、白く不透明な稜柱層を文様に生かすよう工夫されていた。

かつてわたしは、この帯飾りが中国の白玉帯飾りを意識し、かつヤコウガイという稀少な素

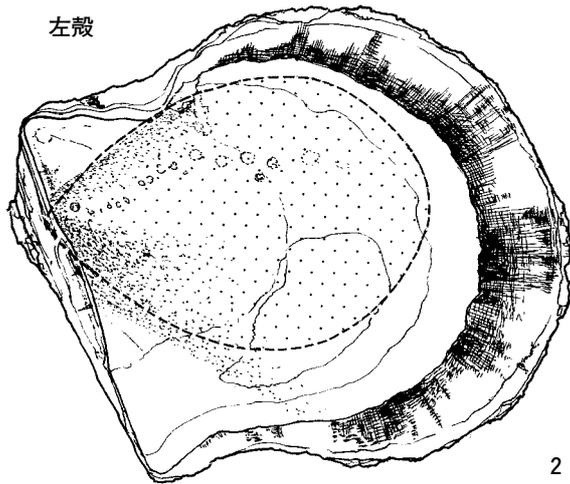


右殻

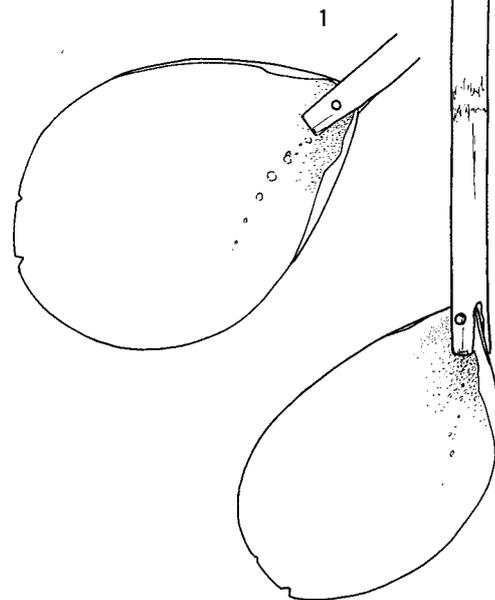


合併した断面図

左殻



2



挿図28 貝匙とアコヤガイ

1：南倉49-1 貝匙No. 1

2：アコヤガイ貝殻と匙使用部位（破線部分）

材を使用したことに意義があったと推測した<sup>(注27)</sup>。今回の観察を通して、工人がヤコウガイのほかにこれとほぼ同じ光沢と質をそなえたチョウセンサザエ類をも選んでいたこと、これらからさまざまな文様を意図的に研ぎ出したことがわかった。チョウセンサザエ亜属の貝をあえて選んだのは、貝殻の大きいヤコウガイでは面積の限られた帯飾りに文様を表出しにくいのに対し、変化に富んだ種々の文様を貝殻の小さなチョウセンサザエ亜属の貝では表現できるからであろう。この点は工人による独自の創意とみてよいだろう。舶来の貝殻から白玉質にみえる帯飾りを作るように下命された工人は、初めて接する「大小のサザエ」に悩みながら、真珠光沢が出ぬように帯飾りをつくったのではないだろうか。

貝瑛・貝環では、ヤコウガイの稜柱層と真珠層の境目を表面に露出させており、表面は両層がまだらになっている。これは、ヤコウガイを殻皮から磨いて稜柱層に達し、そこで平面をとる時、貝殻本体が曲面をなすために下に真珠層の重なりがみえてしまうためである。この状況は帯飾りのヤコウガイ製鈍尾の作り方に共通しており、こうした加工の癖が、異なる3種の製品（帯飾り・貝瑛・貝環）に共通している点は注目してよいだろう。帯飾りは他の素材からみても国産品である可能性が高い<sup>(注28)</sup>。その帯飾りと貝殻加工の癖を同じくする貝瑛・貝環もまた同様に、国産である可能性が高いとみてよいだろう。

#### 4.2. 貝瑛・貝環の用法

貝瑛・貝環がどのように使用されたのかは、よくわかっていない。ただそれぞれに使用された痕跡が明らかであること、孔に紐を通して連結して使われたらしい痕跡が認められ、実用品であったことが推測される。また貝製品と同形の白銅製品（馬蹄形4点・月形6点、南倉166-60・61）が知られ、他に象牙製の月形2点<sup>(注29)</sup>（中倉126）もあるので、これらの形が定形化した装飾型であったことが窺える。

#### 4.3. 螺殻の意味

ヤコウガイは南倉174古櫃第206号納物として31種類の雑多な品物とともに納められていた<sup>(注30)</sup>。これらの中には天平勝宝4年（752）の大仏開眼会時に使用したとみられる品もあれば、長久元年（1040）の墨書をもつものもあってその時期は一様でなく、伝来状況から本品の時期を比定するのは困難と言わざるをえない。

南倉の螺殻は、一般的なヤコウガイ貝殻である。正倉院にはアンチモンインゴット<sup>(注31)</sup>や銅のスクラップ、ガラスの原料、ガラスあるいは釉薬の中間生成物としての丹があって、造東大寺司が自らにかかわる製品をつくるために、関連する原料を保持していたことを窺わせる<sup>(注32)</sup>。ヤコウガイもこのような原料の一つだったとみることは可能だろう<sup>(注33)</sup>。

#### 4.4. 楓蘇芳染螺鈿槽琵琶にみるヤコウガイの価値

本品は、螺鈿用具にヤコウガイとアワビを同様に使用して製作した製品である。唐の螺鈿が

すべてヤコウガイ製であることや、国産とみられる螺鈿製品も本品以外はすべてヤコウガイを使用しているため、ヤコウガイが当時もっともすぐれた螺鈿素材と認識されていたことは間違いない。しかし本品をみる限り、ヤコウガイ螺鈿とアワビ螺鈿の間に装飾効果上の大きな違いは感じられない。アワビにこれほどの装飾性があるのならば、平城宮の工人は積極的に国産のアワビを使えばよさそうなものであるが、本品以外にこうした例はなく、アワビ螺鈿の流行は螺鈿技術が変わる室町時代以降である<sup>(注34)</sup>。

当時国内で行われた螺鈿の多くは貝殻片を木地に埋め込む技法<sup>(注35)</sup>によっていたため、工人は一定の厚さに加工した貝殻板を準備する必要があった<sup>(注36)</sup>。アワビは貝殻が薄いため、外観上の問題はなくても、厚い貝殻板を用いる螺鈿には不適だったのだろう。平城京の工人が学ぶ唐の螺鈿において技術と素材は一体になっていた可能性が高く、初心者の方にとってはヤコウガイが唯一の螺鈿用貝素材と認識されていたのであろう。

#### 4.5. 貝匙のアコヤガイ

正倉院には、飲食器として以下のような種類の匙が伝えられている。

- ・金銀匙（銀に金鍍金したもの 南倉43）：1点
- ・佐波理匙（南倉44）：1点
- ・銅匙（南倉45）<sup>(注37)</sup>：345点
- ・貝匙（南倉49）：60+α点

これらは金属製の匙と貝匙にわかれ、大きさも異なる。金属製の匙は長さ20～25cm（金銀匙のみ29.5cm）、貝匙は34～37cmで大形である。匙部の平面形状についてみると、金属製の匙には円形と木葉形があり、それぞれがセットになっている。貝匙にはこうした明瞭な区別はない。金属製の匙の柄は匙部に対してゆるく外反しているが、貝匙はまっすぐである。このように金属製の匙と貝匙には大きさ、形状に明らかな違いがあり、これらは使用方法を反映したものとみられる。多くの金属製の匙が金色をなす中、貝匙は艶のある白銀色をなし、色彩的にも際立った面があっただろう。貝匙にはそれなりの独立した機能があったとみられる。

#### 4.6. 8世紀前半の貝製品と貝殻

斑貝鞆御帯残闕は8世紀前半の貝製品として定点となる。ヤコウガイとその小型の貝ともいえるチョウセンサザエ亜属の貝を使用して最上級の帯飾りが作られたのは、ヤコウガイが唐できわめて価値の高い素材であることを前提<sup>(注38)</sup>にしなければ理解し難い。この場合、これらの貝殻は、ヤコウガイを螺鈿素材の最高級品とする価値観とともに唐から輸入されたとみることが考えやすい。

問題はチョウセンサザエ亜属の貝の存在である。同亜属の一つであるチョウセンサザエは、シャコガイ類とともに、琉球列島のサンゴ礁地域ではもっとも普遍的な食料であるが、その貝殻が加工されて何かの製品になることはほとんどなく、身をとった後はそのまま棄てられ

る貝である。かりに貝殻がチョウセンサザエであったとして、こうした貝殻をわざわざ都にもちこむ行為は、どのように実現し得るのだろうか。

可能性の一つは中国からの持ち込みである。螺鈿製品が盛んに生産されていた当時の中国で、ヤコウガイ以外の類似の貝殻が螺鈿素材として流通していた可能性はないだろうか。このように思うのは、強く光る真珠層をもつ貝殻がヤコウガイに限られるわけではないからである。たとえばチョウセンサザエはヤコウガイと生息域が共通しているため、ヤコウガイと共に採取される可能性はきわめて高い。また、同じ海で採れるクロチョウガイが流通しても不思議ではない。もちろんヤコウガイがもっとも高価であったろうが、長安の市場にはこれに類似した貝殻の品揃えがあってもよい。遣唐使の一行がこれらを数種買い求めたとすれば、平城京に運ばれてくることは可能であろう。

もう一つの可能性は奄美・沖縄からの持ち込みである。この時期、大和には南島から赤木の献上などがあったとみられる<sup>(注39)</sup>。このときにヤコウガイとともにチョウセンサザエやクロチョウガイがともに運ばれていた可能性がある。しかし当時の大和・南島間にかつてのような交易による経済関係は認められず<sup>(注40)</sup>、大和側に必要な素材が、貢納品として運ばれていたにすぎない。さらにチョウセンサザエはもちろんクロチョウガイ貝殻も南島での利用はきわめて限られている<sup>(注41)</sup>。これらの貝殻が南島でとくに選ばれて運ばれる動機を見つけることは、生産地側でも消費地側でも困難と言わざるをえないのではないか。

以上より、貝殻類は唐で購入されたとみるのが、今のところは考えやすいように思う。8世紀前半の日本の宮廷には、真珠光沢をもつ複数種の舶載された貝殻が保管されており、貴顕の用いる高級素材として必要に応じて使用されたのではないだろうか。

#### 4.7. 8世紀後半のヤコウガイ消費

東大寺大仏開眼供養は、国内の工芸技術の進展に一つの機会を提供したといえよう。『続日本紀』天平勝宝4年(752)4月9日条の記事によると、当日は僧一万人を招請し、雅楽寮および諸寺のさまざまの楽人がすべて集められ、これまでにないほどの規模で五節舞・久米舞・楯伏舞・踏歌・袍袴舞などが演じられたという。この儀式にあわせて笙・篳篥・琵琶・琴・箏・太鼓・鞆鼓などの楽器が多く調べられたことは想像に難くない。正倉院に伝わる同時期の琵琶や箏・琴に螺鈿装飾がしばしば施されていることから、その楽器類にはこれらを手本とした装飾の試みられた可能性がある。日本における螺鈿技術は、このとき初めて本格的に習得されたとみてよいだろう。当時の工人が学んだ主要な技術は埋込式の厚貝螺鈿技法であった。ヤコウガイは貝殻が大きいと一定面積の平面の切り取りを保証し、その真珠層は木地螺鈿に見合う厚さと強い輝きをもつことから、木地螺鈿にとって最高の素材であった。大和にもたらされたヤコウガイは、螺鈿技法と組み合わせることによって初めて貝殻本来の美しさを発揮できるようになったといえる。

螺鈿技法獲得の初期、螺鈿技術と素材は1対1に対応するものとして、唐からまるごと輸入

されたのだろう。楓蘇芳染螺鈿槽琵琶は、ヤコウガイの在庫が不足しはじめて類似の素材を国内に求めた状況を物語っている。8世紀後半においても、一部の装飾を除くと螺鈿製品への強い希求は国内にまだ育っていなかったとみられる。したがってこの時期に貝殻だけが、たとえば琉球列島から単独に入手された可能性は低いのではないかと思う。国産化初期の一定期間すなわち8世紀においては、唐からの輸入に頼って螺鈿を生産していたとみるのが妥当であろう。

## 5. 結語

- ・ 8世紀前半の最高級の帯であった斑貝鞆御帯の帯飾りは、輸入素材であるヤコウガイと、その仲間の貝であるチョウセンサザエ亜属の貝で製作された可能性が高い。ヤコウガイが使われたのはそれが唐で貴重な素材だったからで、これを使用すること自体に意義があったのであろう。帯は中国の白玉帯を模倣したとみられ、貝殻の真珠層以外の部分を故意に選んで制作された。同じ時期、ヤコウガイや見事な真珠層をもつクロチョウガイを用いて複数種の装飾品が作られたが、いずれも貝殻の真珠層を強調した製品ではなかった<sup>(注42)</sup>。
- ・ 8世紀後半、東大寺大仏開眼会を契機に唐の厚貝螺鈿技術が本格的に習得され、国産の螺鈿製品が生まれた。螺鈿技術と組み合わせることでヤコウガイの真珠層は初めてその特徴を発揮することができたといえる。またこれによってヤコウガイを消費する主体的な動機が国内に生まれた。
- ・ 8世紀後半日本の宮都で消費されたヤコウガイ貝殻は、その価値観や螺鈿技術と一体になって唐から輸入された可能性が高い。この時期、琉球列島からヤコウガイが輸入された可能性は低く、それが実現するのは9世紀とみられる。
- ・ 古代の宮都に輸入されたヤコウガイは、8世紀のものと9世紀以降<sup>(注43)</sup>のものに分けて考えられる。前者は唐からの輸入品である可能性が高く、後者は琉球列島からもたらされた可能性が高い。このようにみると正倉院南倉に1点のみ伝来するヤコウガイ貝殻は、これがとくに貴重であった前者に属する可能性が高いだろう<sup>(注44)</sup>。

小稿作成にあたり、黒住耐二氏（千葉県立中央博物館上席研究員、貝類学）、北村昭斎氏（重要無形文化財保持者〔螺鈿〕・選定保存技術保持者〔漆工品修理〕）に多くを教示いただき、千葉県立中央博物館には貝殻標本の利用について便宜をはかっていただいた。また貝殻の切断では江頭俊介氏（熊本大学埋蔵文化財調査室）の協力を仰いだ。末筆ながら記して感謝いたします。

（きのした なおこ 熊本大学文学部教授）

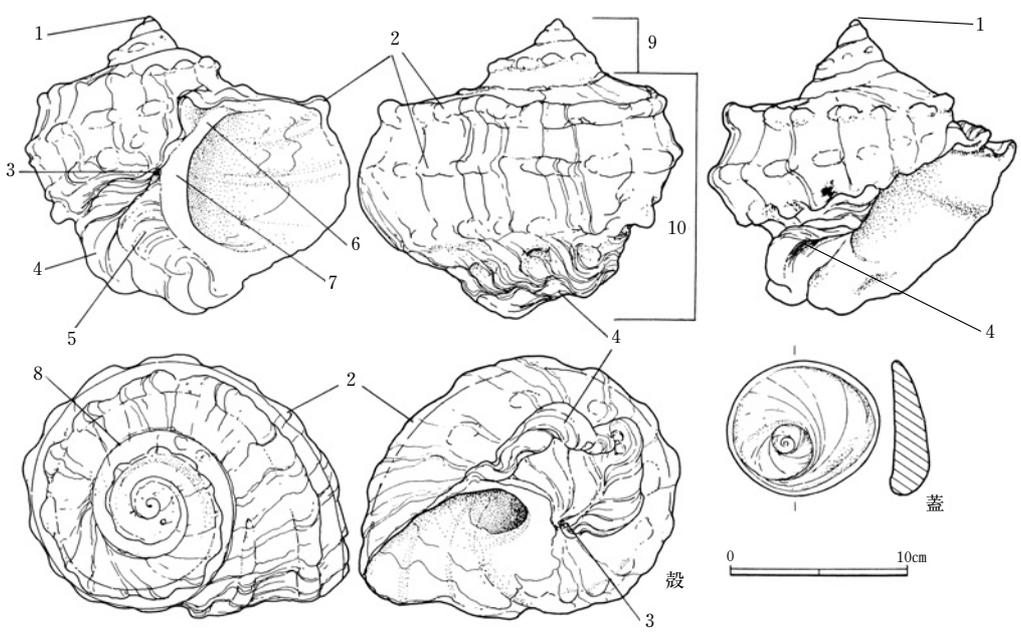
## 注

- (1) ① 大賀一郎・小清水卓二・瀧庸ほか 1957「昭和28・29・30年度正倉院御物材質調査」『書陵部紀要』第8号、宮内庁書陵部、pp.57~81。  
② 和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司 1996「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」『正倉院年報』第18号、宮内庁正倉院事務所、pp.1~39。
- (2) 飾られた螺鈿数は27,084箇とされる。中里壽克 1992「中尊寺の漆芸」『日本の美術』318、至文堂、p.45。
- (3) ① 小島璽禮 1990「海上の道と隼人文化」『海と列島文化』5（網野善彦ほか編）、小学館、pp.139~194、関連箇所はpp.187~189。② 山里純一 1999『古代日本と南島の交流』吉川弘文館。
- (4) 荒川浩和 1985『螺鈿』同朋社。
- (5) 日本列島を、主としてトカラ列島以南の琉球列島と、本州を中心とするその他の地域にわけて示すときに用いる奄美・沖縄地域の慣用語。前者を南島、後者を大和という。
- (6) 代表的な遺跡に喜界島城久遺跡群がある。この中の山田中西遺跡は、9・10世紀から12世紀に栄え13世紀代に廃絶したとされる。喜界町教育委員会 2008『城久遺跡群 山田中西遺跡Ⅱ』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書9、p.135。
- (7) 木下尚子 2003「正倉院と夜光貝—南島螺鈿交易開始試論—」『文学部論叢』第78号、熊本大学文学部、pp.83~106。
- (8) 2007年10月31日、同11月22日、2008年11月21日に実見した。2008年は黒住耐二氏が同席された。
- (9) 貝殻は表面の殻皮（キチン質）と貝殻本体（炭酸カルシウムの結晶とコンキリオンという蛋白質を主とする間基質からなる）とからできている。殻本体は多数の結晶が間基質によってつなぎ合わされており、その結晶の並び方によって稜柱構造、真珠構造などとよばれる。
- (10) 真珠構造をもつ層のこと。真珠構造とは多角形板状のアラレ石（アラゴナイト）結晶が何層にも重なった多重層薄膜構造のこと。注（1）②文献、pp.26~27による。
- (11) 「貝殻に紫外線を照射すると貝殻に含まれる硬蛋白質や色素により貝の種固有の蛍光色を発することがある」ので、この特徴を利用して素材の判別をおこなったもの。ヤコウガイは黄白色の蛍光を発するとされる。注（1）②文献、p.2、p.25。
- (12) 計測値は成瀬正和氏（宮内庁正倉院事務所）による。
- (13) チョウセンサザエはヤコウガイと同じリュウテンサザエ科の巻貝。岩礁やサンゴ礁にすむサザエで、表面に丸く太い肋が8~9条ある。殻高8cm、殻径6.5cm。奄美諸島以南に棲息する。波部忠重 1975『学研中高生図鑑7 貝Ⅰ』学研、p.231による。なお、和名のチョウセンと朝鮮半島とは無関係である。
- (14) 対比したチョウセンサザエは、この種の標準の大きさのもの（殻径7cm弱）で2mm程度の肋幅と本品の縞の幅はほぼ一致する。またその貝殻の構造もヤコウガイとほぼ同じで、真珠層と稜柱層の境目が肋に対応して細かく波打つ本品の特徴とも矛盾しない。紫外線照射では互いに近縁であるヤコウガイとチョウセンサザエは区別しにくい面があるという。ただ、チョウセンサザエはヤコウガイにくらべてかなり小さいため、もし本種が素材であったとすれば使用部位はかなり限定されたはずである。対応する部位はやや平面的で貝殻のもっとも厚くなる体層底部（挿図5右）であろうと黒住耐二氏から教示をうけた。
- (15) 紫外線照射では、比較する貝の種類が遠縁であれば互いに独自性を示すが、近縁であれば互いに類似性を示し区別しにくくなるとされる（注（1）②文献、p.27）。昭和28~30年の材質調査報告にお

いて素材の貝がサザエとされたのはこのことによる。同じ理由から、素材が同じリュウテンサザエ科のチョウセンサザエであっても矛盾はないだろう。

- (16) 荒川浩和氏は「中倉の貝瑛・貝環は垂飾と思われ」としている（注（4）文献、p.206）。
- (17) 平成8年報告では「ヤコウガイであろうとも思われる」という表現がなされている（注（1）②文献、p.7）。今回の判定は黒住耐二氏による。
- (18) 使用によって角が円味をおびたり、艶をもったりすることをいう。考古学の用語。
- (19) 平成8年の報告では「殻口付近の真珠層等の汚染具合からみて、当初から生鮮ではなく死殻であったか、さもなくば長年月雨ざらし状態であったと想像される」とある（注（1）②文献、p.20）。観察では死貝であった痕跡は明瞭ではなかった。
- (20) 北村昭斎氏の最近の研究成果によると、正倉院に舶載された螺鈿には殻径20cm以上の大型ヤコウガイがふんだんに使用されていたことが推測される。これをふまえると、南倉174の螺鈿はやはり小さいといわざるをえない。北村昭斎 2008「正倉院宝物の螺鈿技法に関する知見について」『正倉院紀要』第30号、宮内庁正倉院事務所、pp. 1～21。
- (21) マダカアワビとされる。全体の7割にアワビが使われているとされる。注（1）②文献、p.17。
- (22) 荒川浩和氏・北村昭斎氏も同様の指摘をしておられる。荒川：「二種の配置には規則性は認められず、装飾効果を考慮した用法とは考えられない」（①荒川浩和 1998「正倉院の螺鈿—漆藝史上の意義—」『正倉院紀要』第20号、宮内庁正倉院事務所、pp. 1～40のうちのp.18）。北村：「夜光貝の中にもアワビ貝に似た光沢の乱れや、赤から青に変化する縞状の光沢を持つ貝もあり、なかなか判別し難い事も事実である」（注（20）文献、p.11）。
- (23) 宮内庁正倉院事務所 1995『正倉院宝物7 南倉Ⅰ』毎日新聞社、p.245による。各1束の内、1本の柄は必ず節が高く節間の短い地下茎だとされる。
- (24) アコヤガイは左殻と右殻の大きさが異なり、左殻の方が右殻より大きい。
- (25) 5～6歳と推定されている（注（1）②文献、p.19）。
- (26) 「現生アコヤガイの殻内面には、半円真珠とはならないような異物を取り込んだ小突起を有する個体が多々認められる。しかし、今回観察した貝匙で内面にこのような小突起を有するものは認められなかった。これはアコヤガイの選択にあたって、そのサイズと共に内面の形状にも充分注意が払われていたことを示している」（黒住耐二氏コメント）。
- (27) 注（7）文献による。
- (28) 注（7）文献による。
- (29) 両端の2孔は側面下から内側に穿たれおり、表面からはみえない。
- (30) これらは南倉165に幢幡鉸具として一括されている金具類や灌頂幡垂飾金具に形状がよく似ている。宮内庁正倉院事務所 1997『正倉院宝物9 南倉Ⅲ』毎日新聞社。木村法光 1993「幢幡鉸具について—特に法隆寺系金具について—」『正倉院年報』第15号、宮内庁正倉院事務所、pp.28～47。また唐代の貴族の頭飾にも類似のものがある。新潟県立美術館ほか 1999『中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝「唐皇帝からの贈り物」』展図録、p.156。
- (31) 成瀬正和 1995「短報 正倉院伝来のアンチモンインゴット」『正倉院年報』第17号、宮内庁正倉院事務所、pp.73～76。
- (32) 成瀬正和氏の教示による。
- (33) 平成20年度正倉院展の目録は「本品一箇が伝来する状況は、工芸素材の備蓄と言うよりも、素材標本あるいは珍材の「原石」的な意味合いが強く感じられる」としている（奈良国立博物館 2008『第

- 60回 正倉院展 目録』、p.94)。いくつかの可能性があろう。
- (34) 注(4) 文献、pp.286~289。「正倉院宝物中ほとんどの螺鈿に使用されている貝は板状である」(注(20) 文献、p.15)。
- (35) 「木地螺鈿は木地に模様を彫込み、同文の貝片を嵌込む。貝片は厚貝を用い、(3) 阮咸の剥落片は○・九~一・二mmである」(注(22) 文献①、p.18)。
- (36) 正倉院宝物の螺鈿を復原している北村昭斎氏の作業により、これらの厚さが1~2mmであったことが明らかにされている。注(20) 文献。
- (37) 蛍光X線分析によれば、銅匙成分の80%弱が銅で20%強が錫だったという。いわゆる佐波理にはいるが、色は金色である。注(23) 文献、p.245による。
- (38) 当時唐では螺鈿を宝鈿とも呼び、きわめて高く評価していた。注(22) ①文献、p.5。唐朝廷はヤコウガイを遠方のサンゴ礁地域から輸入していたのであろう。
- (39) 大宰府出土の2点の木簡から、8世紀前半に南島から貢納のあったことが知られており、三島格氏はその品目を赤木だと推定された。三島格 1987「大宰府と南島」『東アジアの考古と歴史』下(岡崎敬先生退官記念事業会編)、同朋舎出版、pp.330~367。
- (40) 木下尚子 2005「貝交易からみた異文化接触—温帯と亜熱帯接触—」『考古学研究』第52巻第2号、考古学研究会、pp.25~41。
- (41) 腹縁部に使用痕をもつものが多いことから刃器の機能が推定されている。盛本勲・比嘉優子 1994「沖繩出土の貝包丁様製品について」『南島考古』No.14、沖繩考古学会、pp.65~82。また小形の製品に使用されることもあるが、少数である。
- (42) このような貝殻の加工について、わたしはこれまで工人がヤコウガイの加工に習熟していなかったためであるとしたが(注(7) 文献)、今回の作業を通してその作風が白玉を意識した意図的なものであったと考えを改めた。
- (43) 貞観14年(872)以降の成立とされる『儀式』「踐祚大嘗祭儀中」には「夜久貝壺八口」との記載があって、ヤコウガイをナマスの杯に使用したことが知られるが、これがヤコウガイの使用に関する最も古い記述とされる。「夜久貝」という表現から、当時の貝殻が屋久島を経由した琉球列島産のものであったことがわかる。
- (44) 国産螺鈿の展開について北村昭斎氏の以下の指摘は重要である。「日本において、五絃琵琶に見られるような螺鈿技法を会得し、それを上回る切削技法が発展してくるのは、現存する螺鈿を見る限り、11世紀以降であると考えられる」(注(20) 文献、p.15)。「11世紀以降に現れる鞍や刀の鞘などの曲面に、繊細な螺鈿を施す為には、夜光貝の様々な部分から適合する箇所を選び、利用する必要があり、これを可能にしたのは、大量の原材料としての夜光貝厚貝の流通の成果によって成しえたものと考えられる」(注(20) 文献、p.21)。



参考図 ヤコウガイ

1. 殻頂、2. 螺肋、3. 臍孔、4. 縫帯、5. 臍盤 (臍索とも)、6. 内唇、7. 軸唇、8. 縫合、9. 螺塔、10. 体層  
 各部の名称は、以下に拠った。  
 奥谷喬司編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会 波部忠重監修 1975『学研中高生図鑑 7 貝 I』学習研究社